

主宰に就任して

松岡隆子

私たちの「葉」は本号をもって満三歳となりました。創刊以来毎月滞りなく刊行できましたことは偏に皆さまのご支援ご協力あつてのことと改めて感謝申し上げます。創刊二年目の九月には岡本眸先生がお亡くなりになるといふ辛い現実には直面するようになりましたが、その試練を乗り越えて私たちの絆はより深まりました。新結社としての基盤も固まり、いま新たに四年目の一步を踏み出すところです。

この節目に、皆さまの総意を受け、四月一日をもって葉俳句会の主宰に就任することになりました。「朝」の後継誌として先生の名に恥じない俳句結社とすべく誠心誠意努めてまいる所存です。

「朝」で学んできた「俳句は日記」という理念を突き詰めていくと、俳句とは何かという命題に到ります。日々の記録としての日記を俳句で綴るといふこ

とは俳句の姿勢が問われることであり、即ち俳句を極めてゆくことに他なりません。俳句は詩です。一行の日記が単なる記録に留まってはなりません。日々の暮しに詩を見出すには、季節の移ろいに暮しを重ね、思いを重ねていくことです。

私たちは何故にこれほど一生懸命に俳句を詠んでいるのでしょうか。それは今在る自分を実感するためだと言えます。人生が宇宙の中の一瞬であるが故に、人は生きている証を求めるのです。鳥が鳴き花が咲くように、私たちは俳句を詠むことで己の存在を表明しているのです。移りゆく季節の中でその時その時の自分を詠むことにより自分の足跡を確認し、またその過程の中で自然界のあらゆる物の命を愛しみ俳句に詠んでいくことは、私たちの人生を豊かにしてくれます。自然に向き合い、自分に向き合い、今を生きる自分を詠むということ新たな指針といたします。

私自身先ず自分の俳句を高めるべく精進してまいります。と同時に皆様の俳句に真摯に向き合い一生懸命に選をしてみたいです。

栞俳句会が今後ますますより良い学びの場となるよう、共に力を合わせて進んでまいりますよう。